



ライブラリーで東川での初仕事(5月4日、ひがしかわ道草館)

中国から来た王雪(ワン・シユエ)さんとともに、役場で国際交流員として活動を始めて3カ月余り。韓国との交流促進のための仕事は少しずつ具体的になり始め、絆の広まりに期待が広がります。「特に島根県の出雲には行きたい」「青森県はたぶん来年の春に」と日本各地の固有文化探訪を楽しみにしているほどの日本通。そして大雪山の懐に抱かれたこの町では「登山もスキーもしたい」とやりたいことは盛りだくさんのよう。さて、韓国からのどんな風を運んでくれるでしょう。

「私は、ハマつたらほかのことが見えなくなるタイプ。今は日本語にハマってます。日本が好き。幅広い日本の文化、弓道とか伝統文化、着物もすごく素敵だと思うし、茶道、剣道、日本文学、日本の音楽とか、一つひとつ分かってくるうちに、日本語もだんだん分かるようになった感じ」とごく自然な日本語で会話が続きます。

「東川町で韓国との国際交流に全力投球し、町のみんなともう一段階国際的なことをやり遂げた」と。

どうしてそんなに日本が好きに? その原点は、高校2年生の時に読んだ韓国語翻訳版の「十二



神饌田お田植え祭で早乙女として神饌米を植えました(5月15日)

国記」(小野不由美著)という小説だったそうです。

「人生で大きなきっかけでした。たまたま読んだ本がすごく衝撃的で、それが日本の本でした。韓国語じゃなく日本語で読みたい、そのために日本語を勉強したい、と思いました」。

「国を治める話とか、スケールがすごく大きい。人間にはいい人もない、悪い人もいない。みんな同じ人間、という日本の思想、考え方、行動のパターンにとても興味がわきました」。

◇ 北海学園大学(札幌)に1年間交換留学生として在札。その間弓道部で日本の武道の精神にも触れました。その時の仲間は今も大切な友だち。

「日本文化を研究し、翻訳家、通訳家になりたい。社会を知らない研究者っておかしいでしょ。たぶん話通じないと思います。いろいろ幅広い視野を持って対処できるようにになりたい。将来の仕事に生かせたら最高だな」と日本の大学院で学び直したい、という目標も。



北海学園大学に留学中、ロシア人留学生と(2010年6月、野幌・開拓の歴史村で)



弓道練習(2011年2月、留学中の北海学園大学で)

表現も違うし感じ方も違う。とても難しいので簡単には伝えられないです。ちゃんと説明しないと、お互いを理解できない。だから誤解が生じるんです。例えば『アイゴー』という表現は、声を出して無念を表す泣き方ですけれど、日本人が無念の涙を流す時は、声を絞って袖で涙をぬぐう、という表現になりますから全然違います。自分が出会うことができる日本と韓国の人々の間でしっかりと交流ができるようになるに力になりたいですね」。

尹 昭熙 (ユン・ソヒ) さん
韓国・大田(テジョン) 広域市から来町

韓国・大田広域市出身、23歳。東川町国際交流員。総務省、外務省、文部科学省と(財)自治体国際化協会(通称JET、東京)が行っているJETプログラム(語学教育等を行う外国青年招致事業)で来日。大田大学校日本語日本文学学科卒業。韓国正2級中等教師資格(高校レベルの日本語教員資格)。北海学園大学との姉妹大学交換留学で2010(平成22)年から1年間札幌在住。7月から農村環境改善センターで週2回(月、水曜日)の初級韓国語講座がスタート。